
薦嬢 - Hiedra -

片山みゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薦嬢・Hiedra

【Nコード】

N6421Y

【作者名】

片山みゆき

【あらすじ】

気が付いたら『BLEACH』のキャラクターに憑依していた
高校生の話。

憑依

プロローグ

俺の名前は高橋良。16歳。

勉強、スポーツ、趣味、バイトとそれなりの青春を送っている高校生だ。

部活はしてないけど、その代わり大型免許を取るため時間を使っている。趣味は色々あるけど、強いて言うなら音楽鑑賞やサッカー観戦かな？好きな選手はと聞かれたら、ジェラードと答える位に俄かだけど。

後は、漫画。

特に最近嵌まっているのが、ジャンプ。
ワンピースとか面白い。

他は、バクマンとか銀魂とかも、良いと思う。
ブリーチナルトは最近微妙だ。

「良、今日のジャンプ読んだかつ」

二限の宿題をやっていると（写しているだけ）と、友達の新天城院龍臥（本名は田村一郎）が話しかけてきた。

「いや、見てないけど」

宿題をやりながら、答える。

「それがさ、変態仮面は実はマダラじゃなかったんだっ」

「へー」

ナルトは、死者が全員生き返る、なんというか展開がはっちゃけ過ぎて、読むのを止めた作品の一つだった。

「黒幕は他に居たんだよっ」

「ふーん」

そうなのか。今度、暇だったら読んでみようかな？

そんな感じで天城院龍臥と話していると、チャイムがなって朝のホームの時間になった。

やばっ、話に集中し過ぎたせいか、宿題終わってないし。

佐々木は提出物重視だからかなり不味い。

えーと、確か月曜一限は……なんだ、ハゲデブか。
焦って損した。

こいつなら、内職出来るから余裕だ。良かった。

「席に着けー、ホームルーム始めるぞー」

生活指導でもある担任が来た。

28歳で既婚だがイケメンな為、人気の高い先生だ。かくいう、俺も尊敬してるし。授業が上手くて、オシャレ、その上求心力もあるからな。

授業が全て終わって、帰宅。

そして、授業の復習やら、免許の勉強やら。色々やっていると、時間が経ち、携帯チェックして、メール返して、シャワーを浴びて、

寝酒して、俺は寝た。

筈だった。

「…………あれ？」

気が付くと、何か白い場所にいた。

「ここ……何処だ？」

部屋を見て、ドアがないことに気付く。

此の場所には、俺が寝ている白いソファーと、大きな鏡くらいしか無かった。

「なんだこの部屋……」

とりあえず、鏡まで歩く。

「でかつ、こんな需要あるのか？」

鏡を見る。

「——え」

虚閃

一話

『BLEACH』という漫画がある。

週刊少年ジャンプに連載されている、中二漫画だ。
といつても、ただの中二では無い。

その圧倒的な画力と個性的なキャラクターで、一部の腐った人達から普通の人達まで幅広い支持を集めている、アニメ化もされた超人気漫画である。

内容は、死神代行の主人公が敵を倒す話で、まあ、その、なんだ？ 色々あって、主人公が敵を倒す話だ。

同じことを繰り返したが、本当にそんな感じの「主人公が敵を倒す」、この一文が妙にじっくり来る話なのだから、説明しにくい漫画なのである。

それで、その話に敵役として、登場する破面アラソカルという種族がいる。

彼らは、仮面を外し死神の力を手に入れた虚ホロウであり、その中で特に崩玉によって生まれた破面は藍染惣右介によって束ねられ、普段は虚圏ウエコムンドにある虚夜宮ラス・ノーチェスに住んでいる。

そして、鏡に写る俺の姿は、その破面の一人『ルピ・アンテノール』そのものだった。

「嘘つ、本物？」

少女と見間違っような、中世的な容姿。

前髪パツツンで、所々カールした黒髪のショートヘアと仮面の名残。

左眉の上にある、薄紫色の仮面紋。

自身が破面であることを示す、白い死覇装。

似ているというよりは、似過ぎている。

そう表現することが的確なくらいに、漫画の表紙で見たルピと鏡に写る俺はそっくりだった。

コスプレ？

じゃないよな……

夢？

頬を捻る。

「痛くない」

ということは、これは夢か……

変な夢だ。

夢は自身の願望や経験を現すっていうけど、もしかして俺はルピになりたかったのか？

いや、いや、流石にそれはない。

どうせなるのなら、普通に主人公とかの方が良いしな。

にしても、本当に女みたいだ。

鏡の中の自分の姿を凝視する。

胸はないし、ついているから男だって理解しているんだけど、どうみても女にしか見えない。それも、超絶美少女。

服で隠れた右手を出して顔を触ってみる。

肌はすべすべで、赤ん坊みたいにもちもちだ。夢の中だと思えないほど、リアルである。

まさか、本当に……

いや、それはない。あり得ない。

自身の中に一瞬浮かんだ考えを即座に否定する。

だって、そんな事が現実にある筈がないんだから。

少し冷静に考えれば分かる事だ。

ああ、くそつ。

今日の俺は本当にどうかしてるな。

思考を止めて、近くにあったソファで横になる。

天上を眺めると、やっぱりそこは白かった。俺の部屋の壁も白いから、そういう所は夢でもちゃんと同じなんだよな。

……寝るか。

そんな感じで、俺は目を閉じたけど

……眠れない。

まあ、夢の中で寝るっていうのもおかしい話だからな。
起きよう。

ソファで寝ていた体勢から、座る体勢に戻る。

はあ、夢っていつ覚めるんだろ……

夢の中で暇って、なんか虚しいんだけど。

って、俺テンション低つ。

もっとこう上がっていかないと。

どうせ夢なんだし、何か現実では出来ないことをしてみるとか。
せっかくこんな珍しい夢見てるんだから勿体ないだろ。

よし、決めたつ。

『ビーム』だ！

ビームを出してみよう。

確か、破面つて虚閃^{セロ}を出せた筈だ。

あつ、でも虚閃ってどうやって出すんだろう？

普通に名前を唱えれば出るのか？

とりあえず、唱えてみるか。

「虚閃」

……

出ない。出ないじゃん。なんだよ、それ。

普通、夢ならそういうのは、あっさり出るんじゃないのかよ。

マジで、有り得ん。

今ので、すごい醒めた。

現実的な夢とか、誰得だっつうの。

「……だるい」

段階を踏まなきゃいけないとしたら、何をすればいいのだろうか？

全然分かんないんだけど。

『諦めんなよ！』

あれ？ この声は……修造？

思わず周りを見渡すが、そこには誰もいなかった。

なんだ、気のせいかな。

『諦めんなよ、お前！！』

えっ？ また？

相変わらずこの部屋には俺以外誰もいない。

じゃあ、この声はどこから？

『どうしてそこでやめるんだ、そこで！！』

もう少し頑張ってみろよ！

ダメダメダメ！諦めたら！

周りのことと思えよ、応援してる人たちのことと思ってみろって！

あともうちよつとのところなんだから！』

——はっ。

意識が覚醒する。

これは……

どうやら、俺は白昼夢を見ていららしい。

それにしても諦めない気持ちか。

流石だ。松○修造はやっぱり違うね。彼ほど熱い男を俺は知らない。

もう少し頑張って続けてみよう。

簡単に諦めたくないし。

先ずは、そうだな……

ドラゴンボールを倣って、霊子を集めてみるとか？

そうすれば、一点に集中した霊子が爆発的なエネルギーを生む筈だ。多分。まあ、これは夢だし。それくらいのご都合主義はあるだろう。

とりあえず適当に掌に力を込めていく。

イメージは、トイレの水が中央に流れていく感じで、すると、

「おっ、なんか紅い水のようなものが集まってる」

人差し指の先2cmくらいの場所に、赤い水のようなものが音を立てながら、渦を巻いているのだ。

おっ、なんかテンション上がったきた。

そのまま、紅い水を指の先一点に留めていくと、直径4cmくらいの球の形に変化する。

「うわっ、凄い」

自身の指先に、もの凄いエネルギーの塊が集めっていくのが分か

る。

これが、破面の力……

いけるっ。今なら、虚閃を出せる。

右手を前の壁に翳して、エネルギーを一気に解放させる。

「虚閃っ」

俺の言葉と共に、紅い球は指先を離れる。

そして、目に写らない程のは速さで、飛んでいった。

「ガアアアアアッ」

紅い球は、あっという間に壁を突き破ると、そのまま空の彼方に消えていく。

「はははっ、凄いつ」

凄いつ、本当に凄いつ。

こんな楽しい遊びは、初めてだ。

世界が変わったような感覚だった。

気持ちが高揚していく。

この一年で二番目にテンションが上がった俺は、そのまま特に何も考えず、もう一度虚閃を撃つ為に霊子を集めようとして

「楽しそうだね。ルピ」

強烈な寒気に襲われた。

まるで、金縛りにあったかのように身体の動きが止まる。

「……っ……あ」

死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。
死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。

死ぬ。死ぬ。死——

「おっと、大丈夫かい？」

「……つあ……はあはあはあはあ」

な、なんだ、今のは？

死んだ？
いや、まだ。

怖い怖い、怖いっ。

「うっ……」

自然と涙が零れる。

“死”というものを、間近で見たせいか、身体の震えが止まらなくなつた。

「おや、ルピ、泣いているのかい？」

男の低く甘いテノール音が、脳に響く。

「済まないね。泣かせるつもりは無かったんだ。ただ、君が造ったばかりの虚夜宮を直ぐに壊すから、少し気が立ってしまつてね。僕を許してくれ、ルピ」

その優しい声に、俺は安心して、よく分からないけど頷いた。

「ありがとう。それでは、私に着いてきてくれ。紹介したい人物が

いるんだ」

紹介？

あれ……、

そういえば、この人は誰なんだ？
顔を上げて、男の顔を見る。

「――え」

俺は固まってしまった。

何故なら、そこにいたのは

「ん、なんだい？」

BLEACHのラスボス、藍染惣右介だったからだ。

十刃

二話

な、なんで、こんな所に藍染が……
あ、あり得ない。
一体、これはどういう事なんだ？

「……っ」

もしかしてここは『BLEACH』の世界にそっくりな夢なのか？
おいおい、だとしたら俺は一体どんな夢を見てるんだよ。
中二かつ、中二なのか！？
田村と違って自分は健全だと信じていたのに。
絶望したよ。中二な自分に絶望したっ。

「ルピ？」

藍染が俺の顔を不思議そうに見ている。
あっ、しまった。こいつが居るの忘れてた。

「いえ、なんでもありません。行きましょう」

「ああ、分かった」

歩きだした藍染の後ろを着いていく。

「どうだい？ 虚夜宮の居心地は？」

「はい。いい感じだと思います」

「そうか。良かったよ」

「……」

「……」

特に会話することも無かったので、場は直ぐに沈黙した。

藍染と俺は互いに無言で虚夜宮の中を歩く。

なんか気不味い。

ラスボスと二人きりって緊張するな。

藍染は特に鏡花水月とかいうふざけたもん持ってるし、あの完全睡眠は一度掛かると終わりだから、気を付けないと。

まあ、それが無くてもルピが藍染に勝てるとは思えないけど。

「着いたようだね」

藍染の声で、俺は考え事を中断して前を見る。

目の前にはいつの間にか俺や藍染の背丈を優に超える大きな扉があった。

「開けるよ」

藍染が扉に手を当てる。

「はい」

大きな音を立てて、扉が開く。

そこには、大きなテーブルがあって、漫画で見たことがあるような破面の面々が椅子に並んで座っていた。

「みんな、遅れて悪かったね」

全く悪く思っていない口調で、藍染が遅刻したことを詫びて、部屋へ入る。

俺もそれに倣い、軽く頭を下げて続く。

「今日は集まってくれてありがとう、エスパーダ十刃諸君。実は君たちに紹介したい人物がいてね。ルピ、前に出てくれ」

「はい」

「紹介しよう。彼が、空いていた第7十刃セフティマ・エスパーダの席に着いてくれる、ルピ・アンテノールだ」

「え」

「ん？ 何か間違いでもあったかな、ルピ？」

「いえ、何でもないです」

「どういうことだ？ ルピは確か、第6十刃セスタ・エスパーダだった筈だ。夢だから本編と少しずれているのか？」

まあ、なんでもいいか。これは、夢なんだし。

「それじゃあ、ルピ。空いている席に座ってくれ」

「はい」

藍染に言われた通り、十ある席の中で唯一空いていた、褐色女と眼帯男の間に座る。

褐色女は原作で第2十刃だったハリベルで、眼帯男は第5十刃だったノイトラだろうか？

互いに奇抜な服をしているから、直ぐに分かった。

「これで、ようやく全ての十刃が揃ったね。私も嬉しいよ」

目の前には、偉そうな爺。自分の頭の上に王冠とか載つけちゃってる痛いところか、こいつはバラガンかな？

ふーん、皆漫画で見た通りの恰好をしているんだな。あ、でもバラガンらしき爺の右目に傷が無い。まだ、傷を負うほどの戦いをしていないということだろうか。

ということは、これから原作初登場までに何かしらのバラガンが戦う機会があるのか。巻き込まれないように注意しないとな。

「では、早速本題に入ろう。この大虚達を見てくれ」

藍染がそう言って机に手を翳すと、白い机に複数の大虚達が写る。これは、大きさからして中級大虚だろうか？

「彼らは見た通り、中級大虚だ。私たちが、探し求めている最上級大虚ではない。本来なら敢えて君たちに話すような存在ではなかった」

「というと、この中級大虚に何か特別な何かがあるのですか？」

ハリベルらしき褐色女が、藍染に聞く。

「ああ、その通りだ。この中の一人に、破面化すれば君たちに匹敵するような存在がいる。今回の仕事は、彼をこの虚夜宮に連れて来ることだ」

藍染のその言葉に、机に写ってうた中級大虚達の中でも、比較的小さい大虚がクロースアップされる。

あれ？ この姿、どこかで……

「彼らは数だけはいからね。無駄にその彼を傷つけない為に、ここは十刃の誰か二人に行って欲しいと思っている。誰か自分から進んで手を上げてくれる者はいないかい？」

「私にお任せ下さい、藍染様」

真っ先に褐色女が手を上げる。

早過ぎる。どんだけ仕事熱心なんだ、彼女は。

「一人はハリベルか。他に誰かいないかい？」

「俺は女と組むのはパスだ」

「俺も断る。このような小童一人に、王たる俺が動く必要もないだろう」

眼帯男と王冠爺が断る。王冠はやたらと偉そうだ。未だスタークプリメーラ・エスパーダがいないから、今の第1十刃は恐らくこいつだろうし、第1十刃ゆえの余裕という奴か。にしても、お前はどこの英雄王だ。キャラが少し被ってるから。

「僕もご免だね。彼には全くそられないから」

「おれもコとわル」

ピンクメガネとフリフリ仮面も続いて断る。

え？ 何この雰囲気？

すっごく険悪な感じなんだけど。

どうしよう？ さっき見た中級の正体も気になるし、俺が行こうかな？

「では、吾輩が

「はい。俺が行きます」

俺が手を上げると、ハリベルとフリフリ仮面以外の全員が此方を見てきた。

なんだよ、こっち見んな。

お前らは一人一人凄く濃いんだから、全員から一斉に見られると怖いんだよ。

「決まりだね。皆ありがとう。今回は、ルピとハリベルに行って貰うとするよ。それでは、他に皆は自由にしてくれ」

藍染の言葉で、十刃達が席を立つ。

ちよび髭の男が此方を最後に睨んでいたが……

なんでだろう？

俺と彼とは今回が初対面の筈だけど。

何か今回の会合で彼の気に障ることをしたのだろうか？

特に何かしたような覚えはないのだが。

ま、いいか。どうでも。

「ルピ、仕事の詳細を伝えるから、こっちにきてくれ」

「あ、はい。分かりました」

それより、問題は今回の仕事だ。

あの中級大虚どこかで見た気がするんだよな。
誰なんだろう？

確か凄い重要人物のような気がする……

豹王

三話

藍染から中級大虚アジューカスが居るといふ場所を教えて貰い、俺とハリベルラス・ノーチェスは虚夜宮を出てその場所に向かっていた。

なんでも、その中級集団は既に虚夜宮の近くに来ているらしく、君たちの響転ソニードなら、直ぐに辿り着けるだろうと不敵な笑みと共に言われた。

響転は未だ使ったことがなくて出来るかどうか焦ったが、足元に霊子を貯めて爆発させるといふワンピースの剃を若干パクったような感じでやれば、案外簡単に出来た。

なんか、虚閃の時のドラゴンボール方法と言い、他の漫画の技を真似してばかりだな、俺。

「ハリベルさん。後どれくらい？」

「恐らく、もう直ぐだろう。ルピ、相手が中級だからって、気を抜かないようにしなさい」

「分かった」

ハリベルは探査回路ベスキスを使って強大な霊圧を読み取ることで、相手の所在が分かるらしい。今回は、藍染が注目していた中級大虚に加え、他にも多くの中級大虚がいるらしく、分かりやすかったとのこと。

俺も、探査回路は使えないことはないんだけど、まだ未熟である

程度まで近くに相手がいないと分からない。

それをハリベルに言うと、物凄く呆れたような顔をしてちゃんと修行しておけと言われた。十刃が探査回路満足に使えないなんて、やはり可笑しいのだろうか？

その時は了解しましたーなんて軽く答えたけど、多分俺が探査回路を磨く時間はないだろう。

流石にこの仕事を終える頃には夢も覚めてると思うから。

「……着いたぞ」

ハリベルが俺に聞こえる程度の声で呟く。

未熟な探査回路を開いて確認してみると、あ、ホントだ。俺やハリベルには全然及ばないものの、そこそこ大きな霊圧がいくつかある。

「なんだあ？」

その中で一際大きな霊圧を持って豹みたいな虚が前に出てくる。

こいつが、藍染の言っていた破面化すれば十刃にも匹敵する中級大虚か。

確かにその他大勢の中級大虚とは一線を慨してるけど、そんなに言うほど強いとは思えない。でも、藍染の言うことに間違いがあるとは考えにくいから、事実なんだろう。

これが十刃たちに匹敵するようになるということは、それほど破面化が強力ということでも。凄いな、崩玉って。

「私たちは、藍染様の使いでお前たちの元に来た。此方の要求はただ一つ。豹の姿をした虚よ、私たちの下に付け。そうすれば、お前も新たな力を手に入れることが出来るだろう」

「ルピ、お前は他の奴らの相手をしていてくれ」

「了解」

俺は豹型の虚に加勢しようとしていた複数の中級大虚の前に、響転を使つて移動する。

「なっ！」

いきなり目の前に俺が現れたことで驚いたエビっばいやつを、響転の勢いそのままに蹴飛ばす。

「ぐあっ」

一応手加減はしたのだが、エビは悲鳴を上げて砂の上を転がり、ピクリとも動かなくなった。

やばっ、加減間違えたか。

この身体になつて初めての戦いだから、微妙な加減とか分からないんだよな。

「あー、ごめんな。そんなに弱いとは思わなくてさ。次からはちゃんと手加減するから」

聞こえているのか分からないけどエビ型の虚に謝ると、何故か他の中級大虚達は怖気づいたように、その場から動かなくなった。嘘だろ、もう終わり？

「なあ、来ないのか？」

「うっ」

俺の問いに、中級大虚達は苦しそうな言葉を漏らすだけで、何も
しない。

なんだ、本当にこれだけで戦意喪失したのか。
つまらない。

この高いスペックを持つ身体で、試してみたいことがたくさんあ
ったのに。

あーあ、どうしよう？

他にすることないし、ハリベル達の戦いでも見ようかな……

探知回路で位置を探ると、すぐ近くに彼らはいた。

爪と刀で打ち合いを繰り返しているハリベルと豹型の虚。その戦
いは、ハリベルが手加減している為か一見すると互角のように見え
るか不思議だ。

しかし、

「……つく、はあはあ」

明らかに疲労している豹型の虚と相変わらず余裕そうなハリベル。
既に、結末は見えていた。

豹型の虚も馬鹿だよな。早く、諦めればいいのに。
何をそんなに意固地になってるんだ。

勝てる筈ないだろ。普通の虚が、破面になんて。

「もう、終わりにしよう。貴様の仲間の一人も傷つき倒れている。
貴様が降参するなら、私たちの方で治療も出来る」

ハリベルが構えていた刀を降ろして、諭すように言う。
優しいよな、彼女。

問答無用で気絶させれば良いのに、敢えて同じステージに立って戦ってあげた上で、実力の差を分からせ降参を促すんだから。

實力不足の俺には出来ない方法だ。

「っ、うるせえっ。俺がお前に負けるかどうかはお前が決めることじゃねえ。俺は王なんだっ。俺の負けは俺自身が決めんだよおおおおおおっ」

豹型の虚はそう叫ぶと、ハリベルの方へ駆けていく。

その命を燃え尽くすように、身体に炎のような霊子を纏わせて。かけえ。なんか、デジモンみたいだ。

えーと、あれだ？ ガルルモン？ 的な感じ。

一方、ハリベルはそれを静かに眺めているだけ。
余裕だ。

「はぁ」

彼女は小さくため息を吐いて、刀を構え直す。そして、目に留まらぬ程の速さで豹型の虚にカウンターを合わせて、虚を気絶させた。凄。流石、ハリベル。

「お疲れ様」

刀を鞘に納めるハリベルに声を掛ける。

「ああ、ありがとう」

「うん。じゃ、俺がこの豹型の虚を運ぶから、ハリベルはその他をよろしく」

豹型の虚を持ち上げながら、言う。俺は殆ど何もしてないし、責めてこれくらいはしないとね。

ハリベルも俺の言いたいことが理解できたのか頷くと、そのまま中級大虚たちの元へ行く。

「分かった。おい、お前達の仲間は私たちが貰っていく。彼が心配なら私たちに着いてこい。傷ついた仲間の手当てもしてやれる」

ハリベルのその言葉に、中級大虚たちの一人でゴリラみたいな奴がエビを持ち上げて、歩いてくる。

なんだ、仲間も平気で喰う虚のくせに、結構良いところあるじゃないか。見直した。

「そ、そのグリムジョーは大丈夫なのか？」

豹型の虚の事が心配なのか、中級大虚たちを代表して牛っぽい虚が聞いてくる。

「うん。全然大丈夫だよ。ハリベルが気絶するぎりぎりの力で攻撃したからほとんど傷も負ってないし。彼女に感謝しないとね」

「なっ、それはた」

俺はそう言っ、響転を使って虚夜宮に戻っていく。普段は冷静なハリベルが動揺していた姿は面白かったけど、早く仕事終わらせたいし。

にしても、仲間慕われてんな、こいつ。
実はいい奴なのかもな。バカっぽいけど。

名前はなんだったっけ？

確か、グリム……

——え？

ちょっと、待て。

あの牛さん、さっきこの虚のことをグリムジョーと言わなかったか。

グリムジョーさんと言えば確かあれだよな？ セスタ・エスパーダ 第六十刃の。

右手で担いでいる豹型の虚を見ると、確かに破面化した彼の特徴を捉えている。

嘘だろ、なんか見たことあると思ったら、グリムジョーだったのかよ。

ちよつ、やばくない、これ？

ルピってグリムジョーに殺されたんだよな？

どうする？ 殺るか？

いや、藍染の命令に背くのは不味い。

打つ手は無しか。

せめて、俺一人ならなんとかなったかもしれないのに。

横にハリベルがいるから、何もできない。

……って、おいおい。俺は何を真面目に考えているんだ？

これは、夢だっていうのに。

現実と空想を一緒にするなんて、実は自分が異世界に召還される勇者なんだって思ってる田村と同じじゃないか。

しつかりしろよ、俺。

これは夢なんだからグリムジョーが生きていても何の問題も無いんだ。

「どうした、ルピ？ 顔が青いぞ」

「いや、なんでもないよ。ハリベル」

そう、なんでもない。

これは現実じゃないんだから。

虚夜宮に着いて藍染にグリムジョーを引き渡した俺は、そのまま
自宮のベットで眠った。

今度こそ、夢が覚めると信じて。

衝突（前書き）

主人公の喋り方、特に語尾等を全話に渡って修正しました。

衝突

四話

結局、夢が覚めることは無かった。

ルピ・アンテノールになって3日目、俺はまだ彼としてこの夢の世界を過ごしている。

あの後、グリムジョー以下中級大虚達の一斉破面化アランカルが行われた。

なんでも、今までは崩玉が完全では無かった為、十刃級エスパーダ以外は破面化しても失敗する可能性が高くて多くの大虚たちが破面化していかない状態であつたらしい。メノスグランデ

本編では語られなかったことだが、まさかあの藍染にそんな裏事情があつたとは。

夢とはいえ驚きだ。

それで、最近手に入れたらしい完全な崩玉とやらで、他の十刃級や大虚未満を破面化させていく内に、崩玉の力を100%引き出す方法を見つけたので、これを機に他の大虚たちも破面化させたい。

ちなみに、100%崩玉の力を引き出した状態で最初に破面化したのはルピだと言われたけど、これは喜んでいいのか？

彼の不気味な笑顔から、実験動物的な意味合いを感じただけだ。

あとは、重症を負っていて命の危険があつたエビさんから破面化して、その次に十刃候補のグリムジョーをさせたから、エビさんとグリムジョーは図らずも原作同様の破面・No.11と破面・No.アランカル・ウンデシーモ
ドセ

12になった。

こうやって物事が本編に近づいていつているのを間近で見ると、日に日にグリムジョーに殺される未来に近づいていつているような気がするから、少し焦る。

セラフティマ・エスパーダ
ルピは第七刃だから関係ないと分かっているけど、自分が死ぬという嫌なイメージは一度想像すると簡単に頭の中から消えてはくれないのだ。

バラ
「虚弾」

目の前に迫ってきた中級大虚を消し飛ばす。

何かしていないと変な事を考えてしまいそうなのだったから、俺はとりあえず自身の高いスペックを使いこなす為に練習をしていた。ヴァーストローデ
名目は最上級大虚を探することになっているので、適当に強そうな奴を探しながら。

グラン・レイ・ゼロ
「王虚の閃光」

先程試していたのは、王虚の閃光と虚弾。

威力や速度はまだ未熟であるが、なんとか様にはなってきた。この程度なら、戦いで使うことも出来るだろう。

カハ・ネガシオン レスレクシオン
他は、反膜の匪と帰刃であるが、前者は使う必要ないから別にいいとして、問題は後者だ。

なんとか使えるようになりたいが、使う場面がないというか、緊張して使いづらいつていうか。

自分の姿が変わるって余りイメージ出来ないから、まだ使えていない。

俺個人としては、出来れば夢が覚めるまでに習得して使ってみたい。やっぱり、必殺技みたいな物への憧れはあるし。

「つと」

これで、最後。普通に殴って、相手を倒す。豚っぽい虚は、悲鳴を上げて消えていった。

「あー、疲れた」

実際はほとんど疲れていないが、適当に愚痴る。ルピ・アンテナの身体は、非常に高スペックで、この身体になってから息を切らしたことがないのだ。ホント、破面の体力って凄い。

「……次行くか」

探查回路を全開にして、近くに強い虚が居ないか探す。

まだまだ、全然物足りない。もっと、戦いたい。もっと強い敵と。

「Hit」

近くに強大な霊圧を持った二体の虚が戦っている。

凄い霊力だ。俺では勝つことが難しいかもしれない。それでも、俺は

——って、あれ？

この霊圧は……破面？ それも、十刃クラスである。

なんで十刃同士が戦ってるんだ……

仲間割れだろうか？

「……行ってみよう」

響転^{ソニード}で近くまで跳ぶ。高低があり、砂丘のようになっている場所の低地で、彼らは戦っていた。

「……あいつら」

戦っていたのは、ノイトラと女の破面だった。

彼女は確か、この前十刃会議で席に着いていた破面だ。本編では十刃落ち（プリバロン・エスパード）と呼ばれていた奴で、石田と戦って負けていた。

なんで、あの二人が？

まさかあの女破面はこの戦いでノイトラに重症を負わされて、十刃落ちになったのだろうか？

いや、確証はない。決めつけるのは早計だ。

ここは、様子を見よう。

刀同士がぶつかり合う音。

身体に負っている両者の傷の量と女破面の刀が折れていることから、ノイトラの優位と思える。

……？ 何か喋っているな。

会話を聞くために、耳に神経を集中させる。

「おいおい、第5十刃様クイント・エスパードよお、偉そうなこと言っというて、その様かあ？」

場面は、ノイトラが失笑気味に女破面に問うている所だった。

第5十刃？　とうことは、ノイトラではなく彼女が第5十刃なのか？

だとしたら、彼は

「黙れっ、第6十刃セスタ・エスパードの癖に生意気なんだよっ、お前はっ」

第6十刃なのか。これは、もしかして……

「くくくつ、お前さあ、それを何て言うか知ってるかあ？ 負け犬の遠吠えっていうんだよつ」

醒めた表情で、そう返すノイトラ。

確かにその通りだ。

女破面は、全身から血を流し、言葉にも余裕がない。既に限界だろう。

「うるさ……っ」

女破面の発言が途中で終わる。

ノイトラの鎌のような一撃が彼女を貫いたのだ。

あれは、きつい。

致命傷だろう。死んだかもしれないな。

ノイトラは、地面に横たわる女破面を見下ろす。

そして、止めを刺そうと、刀を振り上げようとして

「えっ？」

何故か刀を止めた。

どうした？ 何かあったのか？

彼はただ、何か思いを馳せるような目で彼女を見るだけ。

振り下ろせば直ぐに殺せる権利を持っていながら、それを行使しようとしていない。

なんだ？ 一体あいつは何がしたいんだ？

「っ……」

小さな声で何かを呟くと、ノイトラはそのまま姿を消した。

……終わったのか？

分らない。何故、止めを刺さなかった？

彼なら簡単に出来た筈だ。

それなのに……。

響転で、倒れている女破面の近くへ行く。

「大丈夫ですか？」

彼女は、悔しさからか涙を流していた。

「……しょ……ちくしょう」

負けて泣くつていうのは、相当負けん気の強い性格だな。

まあ、そういう女性が好きだが。

「よっ」

気絶してしまった彼女を背負う。

重症だが、ちゃんとした治療を施せば治る程度の怪我だ。
手遅れになる前に、急いで手を打たないと。

響転を乱発して、虚夜宮へ帰る。

治療が出来る破面とかって誰か居ただろうか？

虚夜宮に来たばかりだから、未だ知らないことが多くて分からない。でも、考えているだけの時間はない。

どうする？

ここはやはり、困ったときの藍染惣右介だろうか。

彼ならなんとか出来るだろう。

余り関わりたくないが、仕方ない。

藍染の居る部屋に行く。彼はいつも通り偉そうに王座の上で踏ん返り返っていた。

お前は王様か。

「おや、どうしたんだい？ ルピ」

「いえ、彼女が死にかけているようなので、治療をお願い出来たらな」と

「何故だい？」

「いや、何故って……」

はあ？ お前の部下なんだから、治療ぐらい手前でしろよ。そんなの常識だろ。ばーか。

「彼女は既に大きな怪我を負っている。治療したとしても、彼女が嘗ての力を取り戻すことはないだろう。それなのに、彼女を治療する必要があるのかい？」

うわっ。めんどくさい。

別にいいだろう、治療ぐらい。減るもんじゃないんだから。

「まあ、藍染様がそう仰るのなら俺は全然構いませんが、彼女は仮

にも元十刃なんですから、生かしておけば何かの役に立つかもしれない
ませんよ？」

そう言うつと、藍染は不思議そうな顔をして此方も見た。
なんだ？ 何か変なことでも言っただろうか。

「……ふむ。そうだね。ありがとう、ルピ。君の働きが無かったら、
私は大切な部下を一人失っていたかもしれない。彼女は治療してお
こう。最も、十刃落ちは避けられないけどね」

「ありがとうございます」

礼をして、藍染の部屋を出て行く。

なんか、あいつといると精神的に滅入る。

何か言う度に、いちいち霊圧で威嚇するのは、本当に止めて欲しい。
ウザい。

にしても……これであの女破面が十刃落ちか。

第5十刃の席にはノイトラが座るんだろうし、第6十刃の席には
やはりグリムジョー

が座るのだろうか。

ああ、嫌だな。

夢の中とはいえ、自身の死ぬ未来が近づいてくるっていうのは

怖い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6421y/>

薦嬢 - Hiedra -

2011年11月24日16時54分発行